

中国日本商会

みつま

三潁先生の 「ナルホド中国、ナットク中国」



三潁コラム 中国「津津有味」-66

このコラムも今回で66回目になりました。まさに“六六大順”で万事めでたしめでたし、というわけで、今回を持ちましてこのコラムも“大団円”と致したいと思えます。長らくご愛読いただきありがとうございます。また、何度も北京で講演する機会を頂きましたが、皆様方との出会い、そして交流、多くの啓示を頂きました。改めて御礼申し上げます。

昨今、米中対立は次第に先鋭化しつつあり、どこで歯止めをかけるのか、どう歩み寄るべきかで様々な論評が飛び交っていますが、こういう時こそ基本が大事になります。その基本とは、宋襄の仁と管鮑の交わりの使い分けでしょう。現在の日本で管鮑の交わりを引き合いに出して相手の身になって考えることの大事さを説けば、即、宋襄の仁であると非難されてしまい、日中友好は口に出すのも憚られるような現状です。外務大臣ですら、中国とパイプがあるだけでメディアの餌食になるのですから、極端な話ではあります。そんな中、多くの日本人が中国にどう対したらよいのか躊躇し、経済界すら、アメリカの視線を気にし、世論に怯え、右往左往し始めている状態です。

しかし、冷静に物事の本質を見極め、順序だてて考えれば、さほど躊躇する問題ではありません。まず、国際関係をカントのように捉えるか、マキャベリのように捉えるかですが、人類が平和共存を目指す中、管鮑の交わりを第一とするのでなければ、我々は過去の歴史に何を学んだのでしょうか。「そうはいっても、実際はきれいごとではなく、覇権をめぐるぶつかり合いではないか」という見方もあります。勿論、それゆえに、「治にいて乱を忘れず」、宋襄の仁の戒めも忘れてはならないのです。

次に必要なことは過去に学ぶ学び方です。中国は二つの面で過去に学んでいます。一つは、儒教をはじめとする中国の先哲の処世訓で、もう一つは、明清時には世界トップのGDPを誇った中国が味わった100年に渡る屈辱の歴史です。そこから生まれた、「中国の夢」の「偉大な復興」はこの二つをうまく融合、セットし、国内世論をリードしています。しかし、対外的には、この動きが人類の平和共存に資するものとして捉えられていないのも現状です。それは、中国から見ればアメリカの覇権主義によるツキジデスの罠のせいであり、他国から見れば、韜光養晦そのものだ、ということです。それに輪をかけるのが、中国自身も認める、中国商人の、ともすればモラルを逸脱した強引な商法の事実とイメーজです。それが政府の行動ともオーバーラップし、中国は力をつければつけるほど、世界から疎まれていきます。

一方で、日本はどうでしょうか。アメリカに対する戦争被害の訴えには熱心でも、中国に対する加害行為への反省は非常に希薄になっています。また、それとは別に、中国を非難することには熱心でも、中国の多用な側面を理解しようという複眼的視点も希薄です。

中国日本商会

みつま

三渚先生の 「ナルホド中国、ナットク中国」



日米が中国と一朝有事ともなれば、その災禍は想像を絶します。我々はその歯止めは何をすべきか、単に軍事力の強化だけではなく、両国民一人ひとりが何をすべきかを真剣に考えなければなりません。外交関係における真の民主主義は、一人ひとりの国民が、平和のためにできることから努力することでしょう。米中の狭間にある日本には、度を越えた対米一辺倒を避け、同様の多くの国と連携しつつ、中国には是々非々の態度で臨むべきでしょう。